

CSW62 報告書

白井芙実

今回私は日本女性監視機構を通して、CSW62 に若者支援として参加させていただいた。参加前後も含め、自分自身の内面的変化を中心に、報告させていただこうと思う。

まず、なぜこの CSW62 という機会に参加したかったか、大きく 2 つの理由があった。1 つ目は世界のリーダーたちの声が聞きたかったこと。彼女らは何を考え、何を発信し、どう行動するのかを知りたかった。自分が、leadership とは何かを考える組織に属していることもあり、“リーダー”というものに対して興味があった。国連という世界中の“リーダー”が集まる場所で、様々な leadership を見てみたい。そんな思いがあった。

2 つ目としては、ジェンダーや“女性”という領域の学問や考え方についてもっと知りたいと思ったことである。知識もほとんどなく、ましてや認識も薄かった私は、CSW62 という機会を通してその領域への関心を深める第 1 歩を踏み出したいと考えた。

そんな理由から、若者支援に応募し、運良く CSW62 に参加するという機会を得ることができた。

期間中、私は文字通り“様々な経験”をした。非日常的な日々は私自身の今後の生き方にも影響を与えるものだったのではないかと感じている。

ニューヨーク (NY) にいる間考えたことは、“性”とは何か、女性と男性の関係性である。

滞在 10 日が過ぎるころから、私は“性”とはなんだろうと考えるようになった。それは LGBTQ の NGO 主催のイベントを通じて、あるいは市内にある the center の訪問がきっかけであった。日本ではまだ見かけることが少ない all gender のトイレ。私は何の抵抗もなく使用したが、考えてみれば初めての体験だった！そこで感じたことは“性”と言う概念はあくまでも社会的分類でしかないということ。日本では男性と女性で分けられているトイレを使用し、男性と女性という分類を気にして男性用トイレを使用することはない。しかし all gender のもとで、何も考えずトイレを使用できた。私は正直、こんなものかと思った。

しかし、この“性”というものによって生まれる団結もあれば、失う人としての“権利”や“希望”が存在しているのも現状であり、何のための社会的分類なのだろうかと考えるが未だ答えは見つかっていない。

次に、女性への男性の engagement に関しても考えた。CSW62 全体を見ても男性の参加率は圧倒的に低い。もちろん男性である人にとっては自分の性には直接関係のない機会かもしれない。しかしこの話は男性も考えていかなければならないことは確かだと思う。今回の CSW62 においての争点の 1 つであった family and unpaid care work も日本社会の中ではなかなか議論として上がってこない話題。例えば家事労働であるが、これも労働の 1 種だからこそ正当な評価、対価を得なければならない。しかし、この労働は評価や対価を得ることができないことから、仮に男性が家事労働を行いたいと考えても選択することが厳しい、性別によって選択する範囲が決まってしまうている、実質的には選択することができない社会になっているのではないだろうか考えた。

世の中の理想形態は、自由に“選択できる状態”だと考えている。本当は家事労働をして生

きていきたい男性にとって、対価が払われる未来が来ない限りそれだけに専念する選択を取ることは難しい。権利がある程度保護されている男性であっても選択できない状況にあるこの社会を変えていきたい、そう思った。

帰国後、ジェンダーという分野に興味を深まり、今私は基礎から学ぼうとしている。この切り口が増えたことも、成果のひとつだと思う。

最後に、日本女性監視機構の皆様、私を選び、この CSW62 に送り出してくださって本当に有難うございました。私にとって人生の財産となりました。NY での経験や自分に沸き上がった感情を人生の糧とし、いずれ社会に還元し、支援していただいた恩返しをしたいと思っています。

もしこの報告書を読んだ方で、CSW に参加することを迷っている方があれば私は参加を強く促します。あなたにとってこの機会は何かの 1 歩に必ずつながると思うからです。